K・M・ロビンソン著

『進歩の継子——インドネシアの鉱山町における開発の政治経済学——』

Kathryn M. Robinson, *Stepchildren of Progress: The Political Economy of Development in an Indonesian Mining Town*, アルバニー, State University of New York Press, 1986年, xiv+315 ページ

I

本書は，インドネシアのスラウェシ（Sulawesi）島のニッケル鉱山の町ソロアコ（Soroako）におけるフィールドワーク（1977～81年）に基づく人類学的モノグラフである。この町は，世界最大のニッケル鉱山会社（International Nickel of Canada，以下「鉱山会社」あるいは「会社」と略記する）が1969年に操業を開始して以来，旧ソロアコ村を含めてその周辺に形成された。調査当時この町の総人口は8000人（旧ソロアコ村の住民であるソロアコ人〔orang asli Soroako〕は1000人），うち3500人が直接間接にこの会社に雇われていた。したがって，この町は名実ともに鉱山の町，あるいは鉱山会社の「企業城下町」であったと言えよう。

本書の主題は，鉱山会社の進出がもたらした農民のプロレタリア化が彼らの生活・文化・価値観をどのように変えたのか，という点にある。この際著者は鉱山会社を，外国資本による資本集約的プロジェクトおよび，それによって経済開発を推進しようとするインドネシア政府の開発戦略の象徴としてとらえている。このため本書は，人類学的モノグラフであると同時に，現政府の開発戦略およびそれを支える開発理論に対する批判の書ともなっている。本書のタイトルにある「進歩の継子」とは，本来開発の利益を優先的に享受できると期待していた，「土地の子」（anak daerah）すなわちソロアコ人が，現実には継子のようにその恩恵から疎外されている状況を彼ら自身が表現した言葉である。開発の問題は伝統的に経済学ないしは政治経済学の分野に属し，人類学の研究対象にはなりにくかった。しかし，開発が社会文化的諸問題をも含むことを考えると，本書は開発経済学を専攻する研究者にとっても参考になろう。評者の個人的関心からすると，開発という経済現象が人類学者の目にどのように映るのか，という点も大いに興味がある。経済史を専攻する評者がこの人類学的モノグラフを書評に取り上げた理由も，こうした個人的興味からである。内容の検討に入るまえに，本書の構成を示しておこう。

本書は，第1章 イントロダクション，第2章 鉱山町，第3章 ソロアコ村——その住民と彼らの近代世界への編入初期段階，第4章 政治的独立——新体制下の（ソロアコ）村，第5章 プロジェクト以前の土地，労働，社会関係，第6章 周辺資本主義経済における農民，プロレタリア，商人，第7章 支配と対立——会社，村落，国家，第8章 ヒジュラの結婚——変化する社会関係，第9章 人種関係と階級支配，第10章 進歩の継子——鉱山町におけるエスニシティと階級意識，第11章 結論の11章から成っている。以下，この11章を，第1章のイントロダクション，第2章から第5章まで，第6章から第10章までの3部にわけて検討する。最後の結論は本書の要約であり，ここでは特に新しい議論の展開はない。

II

第1章のイントロダクションは，著者の問題意識と方法論的議論に充てられている。本書の主題や構成からも分かるように，著者はマルクス主義人類学の立場に立っている。その基本的な枠組は，ネオ・マルクシスト研究者に大きな影響を与えてきた，フランク（A. G. Frank）の従属理論，ウォーラースタイン（P. Wallerstein）の近代世界システム論，アミン（S. Amin）の中心—周辺理論などをベースにしている。まず，本書の研究対象であるソロアコも含めて，人類学は周辺資本主義地域（第三世界）に住む人々を研究する，と規定される。このような地域にも世界経済は到達しているが，それは，資本主義が地球規模で浸透しているからである。第三世界の貧困と停滞とは，これら地域の従属的性格に由来する。

以上の認識に基づいて著者は人類学の課題を，資本主義市場および資本主義的生産様式の拡大に伴って生ずる全ての変化を記述すること，と規定している。その際著者は，階級的分析を重視し，その社会に住む人々の生きた経験に耳を傾け，住民が自分自身と自分を取り巻く世界をいかに理解しているかを，参与観察によって微視的な観点から具体的，個別的に理解することの重要性を強調している。ところで，著者によれば，人類学が変化を扱う場合採用してきた文化変容（acculturation）のパラダイムは，本来先進国と低開発国との関係として論じられるべき問題を，巨視的な文化現象（modernization や urbanization）に矮小化しているという。そして，その文化変容にしても，西欧的価値や規範への適応として理

解される。評者もこの批判に基本的には賛成であるが，著者の言う，先進国と低開発国との関係とは具体的に何を指すかがやや曖昧である。また，従来のマルクス主義人類学には一般的な構造に主要な関心が向けられ，個別社会の固有な形態（たとえば生産様式や交換様式）にはあまり注意を払わない傾向がある，と著者は批判している。以上の課題と方法論的立場を念頭に置いて，ソロアコにおける変化の記述を見てみよう。

III

第2章から第5章までは鉱山町としてのソロアコの記述である。鉱山会社の進出以後，ソロアコの経済基盤であった最良の農地（水田）のほとんどは会社用地として収用され，商業もブギス(Bugis)移民が担うようになった。このためソロアコ人の最も重要な職業は，鉱山会社あるいはその契約会社の労働者となった。鉱山町では会社における地位や階級こそが社会生活の中心であった。白人系外国人を頂点とし，スンダ人，ジャワ人，スマトラの諸種族，スラウェシの諸種族，そして最底辺のソロアコ人へと続くピラミッド型の階級構成に従って，賃金，店，学校，無利子の住宅ローン，有給休暇に大きな格差があり，住宅地区や生活様式がはっきりと分かれていた。著者によれば，ソロアコにおける現地労働者の低賃金と不平等は，資本の国際化に伴って「周辺」地域で生ずる現象であり，労働組合抑制等の条件を提示して外国資本を誘致しようとする政府の政策，人種的差別，現地人の産業予備軍化によって引き起こされている。以上が第2章の骨子である。

第3章は，ソロアコ人のアイデンティティーがどのように形成されてきたかを，独立以前の歴史体験を通じて検討する。ソロアコ人のアイデンティティーの基盤は村の土地であり，村民の共通体験であった。彼らの口誦伝承にも村の内部で起こったことしか登場しない。しかし，19世紀末にオランダ商業勢力がロタン，樹脂（ダマール）などを求めて現われると，ソロアコにはブギス商人が進出し，ソロアコは世界経済へ巻き込まれるようになった。さらに20世紀初頭に，ソロアコはオランダ植民地支配のもとに組み込まれ，社会生活でも大きな影響を受けた。たとえば，従来は同列中の首位であった村落の指導者たちは，植民地権力の下で村民を支配するようになった。また，金納税は村民に唯一の現金収入源であったロタンと樹脂の採取を強制した。農業においても，焼畑から水田耕作への転換が強制的に行なわれた。ブギス人との接触はソロアコにブギス的生活様式とイスラム教をも浸透させた。そしてイスラム教は，ソロアコ人の反オランダ感情の精神的結節点として機能した。つまり，孤立したソロアコ社会はブギス人およびオランダ植民地権力との接触によって，世界経済に巻き込まれ，イスラム教とブギス的生活様式がソロアコ人のアイデンティティーを構成する重要な要素となったのである。

第4章は，第3章の問題を独立以降1980年代初頭までの期間について検討している。まず，1950年から65年にかけて南スラウェシ一帯に起こり，ソロアコも巻き込まれたイスラム反乱は，イスラムを旗印とした地方(周辺)の，共産主義と中央に対する反乱であった。この反乱が，地方に対する中央の優越，共産主義勢力の壊滅をもたらしたことは周知の事実である。一方，この反乱はソロアコに厳格なオーソドックス・イスラムとブギスの生活習慣とを定着させる役割を果たした。著者によれば，この二つが現代ソロアコの文化的アイデンティティーの中核である。1965年以降インドネシアは革命から開発の時代に突入し，外国投資が積極的に推進された。ソロアコに進出した鉱山会社もその一環である。会社の進出当初は雇用機会が増大して現地の労働者もその恩恵に浴したが，1974年の石油危機を境に大規模な解雇が行なわれ，同年から82年までに雇用者数は1万1000人から3000人へと激減した。会社は，インドネシアの独立と同様に鉱山プロジェクトも個人の犠牲によって成就される，というイデオロギーによりその措置を正当化した。さらに会社は，著名なイスラム指導者をよび，イスラム行事を援助するなど，イスラムの擁護者，すなわちソロアコの文化的アイデンティティーの擁護者として立ち現われるようになった。

第5章は，会社進出以前のソロアコにおける社会経済構造の分析である。植民地支配以前の主要な農業形態は焼畑で，そこでは地位の差が生産手段（土地）の利用に不平等を生むことはなかった。しかし1930年代の水田開発は，土地の私有化，売買を通じて土地の集積，地主の台頭を促進した。地主のなかには，樹脂を産する木をも私有して商業利益を蓄積し，その利益で土地と水牛を集積して土地と労働（小作や農業労働者）を支配するようになった者もいる。これら地主＝商人には親族関係を通じて労働を支配する傾向があり，そこでは「経済外的強制」が働いていたという。樹脂の採取にも，家長が家族にその採取を命じ，収穫を折半する新たな経済関係が現われた。ソロアコの樹脂は外部の商人に買い取られ，最

終的にはオランダ人によって海外に輸出された。こうした商業活動を著者は新たな余剰労働の搾取とみなしている。ソロアコの主要な在来産業であった織物業や製鉄業は，ヨーロッパから輸入された布や屑鉄によって駆逐されてしまった。以上を要約すると，植民地支配は，搾取を許す生産手段の所有形態（土地の私有）と，貿易を媒介とした余剰労働の搾取とを組織的に推進した，というのが著者の論点である。

IV

第6章から第10章は会社進出以後の社会経済変化の分析である。第6章は資本主義経済の浸透に伴う経済生活の変化を扱っている。一つは，仕事と家庭の分離である。夫が会社に勤めている場合，妻は夫がどこで何をしているか分からない。二つは消費生活の拡大である。貨幣経済の浸透は人々を新しい消費財に引き付けた。このため，著者のサンプル調査によれば，3分の2の家計は店や商人に負債を負っていた。三つは，生活サイクルの変化である。町の生活は会社の給料日を中心に回転するようになった。たとえば，貸家の所有者は家賃を，商人は売掛金を会社の給料日にまとめて徴収した。焼畑を営む農民も，一時に多くの労働力を要する植付日を会社が休みとなる日曜日に行なうようになった。一方，以前には催されていた収穫後の儀礼も行なわれなくなった。

第7章は，土地の接収に伴う住民の不満と社会関係における意識の変化を扱っている。政府の土地接収は極端に安い価格で，軍と警察をも動員して強引に行なわれた。それでも多くの住民は現金の受取りを拒否した。また，土地代金の分配に縁故が介在し，それは非常に不平等であった。政府が接収した土地に家が立っていた場合，会社が提供したブルドーザーで建物を破壊した。この光景は，誰が最終的に権限をもっているかについて，住民に少なからず混乱をもたらした。土地問題を通じて出現した新たな価値観を住民は三つのシステムと評して表現した。すなわち，ずうずうしさ（system berani），縁故（system famili），賄賂（system amplop），の三つである。

第8章は経済変化と交化変容との関係を，家庭生活と結婚形態の変化を媒介として検討する。まずプロレタリア化した家庭では，妻の専業主婦化と，妻の夫に対する経済的依存がもたらす情緒的依存が浸透した。また，家庭の経済的地位が生産単位から消費単位へ，経済組織の再生産場所から資本主義経済を支える労働力の再生産場所へ変化した。そして，無償労働を余儀なくされる妻にとって，夫や家族に対する愛情こそが重要であるというイデオロギーが醸成されることになる。結婚について言えば，愛情に基づく結婚が理想化される一方，会社から高い賃金を得る者が新しい財とサービスを手に入れ，これらを結婚の際の贈物として利用するなど，結婚に階層的要素が持ち込まれるようになった。結婚式の意義や形態も大きく変わった。以前には，結婚式とは第一義的に村の行事であり，マットの上に座り，バナナの葉から手で食べた。しかし現在では誰がお客として呼ばれるか，どんな肉が出されるか，衣装にどれほど金がかかったか，などが重要な関心事である。また，会社から借りた皿，スプーン，フォークなどを使用することが，会社とのコネクション，地位，権力を顕示する意味で重要な要素であった。

第9章と第10章は，人種と階級の問題である。この問題に対する著者の基本的立場は，支配階級のイデオロギーとしての人種差別は独立によって終わったわけではなく，資本の国際化，多国籍化に伴い，新たな形で重要性を増大しつつあるというものである。この具体的な例として著者は，ソロアコの鉱山会社における階級区分が，ヨーロッパ人を頂点として人種的，民族的（ethnic）区分と対応していることを挙げている。階級構成と人種構成とが重なりあった場合（ソロアコの鉱山会社のように），それは支配する側によって支配を正当化するイデオロギーとして利用されるだけではない。支配される側も，本来は階級的対立である問題を人種的対立であるかのごとく意識してしまう傾向がある。このような限界をもちながらも，ソロアコの住民は，たとえば土地代金の受取りを拒否したように，ソロアコ人としての「民族的」アイデンティティーを精神的支えとして抑圧に対抗することはできた。

ソロアコにとって鉱山会社の進出は，19世紀末にオランダ商業資本が登場して以来何度も直面してきた資本主義化の波の一つとして位置づけられる。政府の説明では，かかる巨大プロジェクトの利益はやがて一般住民にまで「滴り落ちる」（trikle down）はずであったが，現実にはソロアコの住民はその利益から疎外された，進歩すなわち開発の「継子」となってしまった。著者によれば，そもそも外国資本と手を組んだ国家のエリートによって作られた政治状況のもとで，利益が労働者にまで「滴り落ちる」ことはなく，利益は労働者の闘争によって勝ち取られるものである。これが本書の結論である。

V

最後に評者の本書に対するコメントを述べてみたい。まず全体的な評価から始めよう。冒頭でも述べたように，本書は開発の問題を人類学の立場から検討している，という点において，また，人類学的研究でありながら変化の問題を正面から扱っているという点において非常にチャレンジングな労作である。しかも，具体的な開発プロジェクトに即した人類学的研究が少ないだけに本書の意義は大きい。もっとも，人類学が対象とする地域はほとんど第三世界に属しており，そこでは開発問題が何らかの形で進行していることを考えると，開発に伴う社会文化的変化は，人類学全体にとっても重要なテーマであるはずである。確かに，本書は通常われわれが人類学的著作に期待する，文化や社会の記述とはかなり異なった内容となっている。しかし，上に述べた事情を考慮すれば，かかる研究がもっと多く出てきてもおかしくはない。著者が現代のソロアコを分析するために歴史的視点を取り入れて，相当のスペースを割いている点は大いに評価できるが，その割には歴史的記述が雑になっている印象は拭えない。経済史を専攻する評者としてはやや不満なところである。

農民のプロレタリア化が彼らの生活をどのように変えたか，という本書の課題は，上に詳しく紹介したように，かなり具体的に説明されていると思われる。本書が最も精彩を放っている部分は，この変化を記述する際に，住民自身が語った言葉が頻繁に引用されていることである。これは言うまでもなく，住民の言葉に耳を傾ける，という著者の基本的な態度を反映しているのであるが，同時に，住民が何をどのように感じているかを，われわれに直接伝えてくれる。これは本書の大きな利点である。しかし部分的には幾つかの問題を残している。とりわけ，十分な実証的裏付や論証なしに断定する個所が少なからず見られる。たとえば，植民地期以前のソロアコは孤立した社会であったとか，そこでは村の首長は「同列中の首位」であったという断定が検証されることなく下されている（第3章）が，これは，伝統社会のステレオタイプ化した表現をそのまま用いただけである。また著者は，プロレタリア化した家庭では，妻が夫に経済的に依存しているため，情緒的にも依存するようになったと述べている（第8章）。論理的には著者の主張はよく理解できるが，著者はこの部分では女性の地位に関する一般的文献を引用しているだけで，ソロアコにおいて実際にそのような事実があったことを示す事実を全く提示していない。これらはほんの数例にすぎないが，議論の飛躍がしばしば見られることは残念である。これは著者が，時にマルクス主義的図式を詳しい論証を省いてあてはめてしまうことにも現われている。ここで詳しく論ずる余裕はないが，たとえば，低賃金と労働者の産業予備軍化にしても，土地（水田）の私有化と階級的搾取との関係にしても，もう少し詳しい論証が必要であると思われる。

マルクス主義的アプローチがあまり受容されていない日本の人類学会で本書がどのように評価されるのか，また実際に低開発国の経済開発にたずさわる人々が本書をどのように評価するのか，非常に興味のあるところである。

大木　昌（インドネシア社会経済史専攻）